

15・日本のとんち話＝「毒梨と茶碗」

ある村に小さなお寺がありました。庭に一本の梨（なし）の木があり、今年初めて大きな実が五つなりました。「おお、よかった、よかった。うまそうななしが実るに違いないわい」と、和尚さんは大喜びです。虫にくわれないようにと、紙袋を作ってなしの実にかけ、大事に育てていました。なしはだんだん大きくなり、袋が破けて、実がはみだしてきました。

ある日、和尚さんは法事で檀家へ出かけることになりました。しかし、なしが心配になり、留守番の小僧さんに言いました。「小僧や。庭のなしは毒なしだから、絶対に取って食ってはならんぞ。もし、あのなしを食ったら、お前はころりと死んでしまうぞ。いいな」「はい。わかりました。和尚さま。いってらっしゃい」。小僧さんは、おじぎをして、和尚さんを見送りました。

一人になった小僧さんは、庭へ行って竹の棒で、なしをつついてみました。なしは、紙袋を破って大きくなっていました。おいしそうでした。小僧さんは食いたくてたまりません。「ありゃっ!」。小僧さんが竹の棒でつついていると、大きいなしが一つもげて、ぽとんと下へ落ちてきました。和尚さんは毒なしだから食うなと言ったけれど、あんまりおいしそうなので、小僧さんは、ひと口がぶりとかじりました。「おお、甘い」。よく熟したなしは、甘い汁が滴りました。小僧さんは夢中で一つ食ってしまいました。

しかし、ちっとも毒に当てられることもなく、何も異状はありません。「和尚さんは、私に食わせまいとして、毒なしだとうそを言ったんだな」。小僧さんは、そう言って、もう一つなしを落として食いました。あまりにおいしいので、もう一つ、もう一つと、次々と落として食い、とうとう五つのなしをみんな食ってしまいました。

その時小僧さんは「困ったなあ。和尚さまが帰ってきたら、どんなに怒るだろう」と、心配になってきました。和尚さんが帰ってくる時間が迫ってきたので、小僧さんはあることを考えました。家の中に入り、和尚さんがいつも大切にしている湯飲み茶碗を、土間へぶつけて割りました。それから、唾を目のまわりにぬりつけて、手を顔に押し当てて、泣く真似をしました。

和尚さんが帰ってきました。「小僧や、今帰ったよ。何も変わったことはなかったろうな」。和尚さんがそう言いながら家の中へ入っていくと、小僧さんは障子の陰で、しくしく泣いています。「おや。どうしたんじゃ。何を泣いているのじゃ。一人で寂しくて泣いておるのか」と、和尚さんが声をかけると、小僧さんは首を振って、泣きじゃくりながら言いました。「いいえ。和尚さま。寂しくて泣いているのではありません。和尚さまが大切にしていらっしゃる茶碗を洗おうと思ったら、落として割ってしまいました。それで……」。「なに!」。「申し訳なくて、私は死んでお詫びをしようと思って、庭の毒なしを取って食いました。一つ食っても死にません。二つ食っても死にません。とうとう、五つ全部食いましたが死ねないのです。どうしたらいいかわからないので泣いているのでございます」。「げっ! あのなしを五つ、全部取って食うてしもうたのか!」。

和尚さんは思わずどしんと、尻もちをついてしまいました。しかし、小僧さんを叱ることはできませんでした。